

就労継続支援 B 型事業所「ヘレン・ケラー治療院 鍼灸・あん摩マッサージ指圧」見学記 高橋計之（ひと・まち社評価者）

社会福祉法人ヘレン・ケラー協会はヘレン・ケラー女史の来日を記念し、70年ほど前に創立した長い歴史を持ち、鍼灸・あん摩マッサージ師を養成する「ヘレン・ケラー学院」、「点字出版所」、「点字図書館」、「盲人用具センター」など幅広い事業を展開している。今年4月新たに視覚障害者を対象とした就労継続支援 B 型事業所「ヘレン・ケラー治療院 鍼灸・あん摩マッサージ指圧」を新宿区に開所した。



事業所は学院の旧教室を改装したもので、明るく清潔感があり、整然としている。動線に点字ブロックがあり、利用者が活用する施術室は各施術台（ベッド）近くに棚を置いて施術に必要なものをまとめられるようにしてあり、施術台は高さ・勾配が調整できる電動式を導入して、施術する側・される側が共に楽な姿勢を取れるように配慮している。隣室の多目的室は、利用者に貸与するロッカー、休憩コーナー、点字作業スペースになっている。

今後の展望等について、新規事業担当三浦様より説明を受けた。

かつて、鍼灸・あん摩マッサージ師の仕事は、視覚障害者の生業となっていたが、近年は晴眼者が多くを占めるようになり、視覚障害者が資格を取得してもその資格を活かすことが難しくなってきた。資格を持つ視覚障害者が社会に参加する仕組みとして開設した。

利用者の定員は20人で現在は4人が登録している。本格稼働はこれからだが、工賃は鍼灸、あん摩マッサージ指圧の施術やその補助業務などから得る予定である。勤務する職員のうち4人はあん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師等の免許を持っており、利用者の施術を支援する。

今後の課題は、利用者を増やし、鍼灸・あん摩マッサージ指圧の患者をバランスよく確保することである。また、点字名刺の受注や自主製品の販売、公園などのグリーンメンテナンス等に順次取り組もうとしている。

視覚障害者に特化した、事業所は少なく、視覚障害者や関係者、行政より期待されている。

自治体政策研究会主催「介護保険制度20年を検証する」第2弾：2022年6月4日開催

「介護の現場からの報告」 社会福祉法人悠遊理事長 鈴木礼子氏より

社会福祉法人悠遊は設立29年

「社会福祉法人悠遊」は1993年、「生活クラブ生協・東京」の組合員の寄付により西東京市でデイサービスから始まった。現在、西東京市をはじめ、世田谷区、中野区で、グループホームや小規模多機能事業所など13事業所を運営している。一人ひとりがその人らしく暮らせるよう在宅生活を支えることを介護理念に、14年間奮闘してきた。介護保険制度で「介護の社会化」はできるのか、利用者・家族、事業者にとってわかりにくいこと、職員の賃金は全産業平均よりも8万円も低く、その人の生活や生き方を大事にした質の良いケアをしている介護職員のモチベーションを保つのは難しいことなど、事業者として厳しい面が報告された。

煩雑な処遇改善加算

介護職員の処遇改善加算は、改正を重ね「パッチワーク加算」とも言われている。算定の項目は細かく、申請には事務作業に専念できる職員が必要だ。大きな法人は有利だが、小さな事業所は忙しくて手が回らず申請を断念している現状がある。事業所にとって事務量が増えることは大きな負担だ。

また、コロナ禍による給付金は前年比で計算されるため、一昨年、中野拠点を増設した悠遊は、影響を受け

ているにも関わらず、法人全体の収入が増えたため給付の対象にはならないのだった。

今後、必要なサービスは受けられるか

処遇改善加算が行われても、人材不足は解消されていない。今後、高齢化社会となったとき介護難民が出るのは明らか。どんなにIT化で科学的介護を屈指しても介護者がいなければ介護はできないため、加算ではなく介護者の基本報酬を上げることは急務なのだ。加えて、小規模多機能型居宅介護事業（通い訪問・泊まりを組み合わせたサービス）のスタート時には、順調な滑り出しを支援する自治体独自の施策が望まれる。



悠遊理事長 鈴木礼子氏

報告を受けて

労働環境を整えなければ人材不足は解消しないこと、最期まで尊厳を保ち自分らしく暮らせるような支援を実現するには、制度と介護の現場の実態を知ること、さらに相談窓口を充実させて短時間に必要な支援につなぐことの必要性を課題として共有する機会となった。

文責：工藤春代（自治体政策研究会会員）

編集後記：我が家のプランターに、今年も青紫蘇がたくさん芽を出した。早速、間引いて大切に育てていたら、ある日、脇の葉っぱばかり大きくなって、新芽が育っていないことに気がついた。観察していると、夜にダンゴムシが青紫蘇に登って、ムシヤムシヤと新芽を食べていたようだ。でも、段々と青紫蘇が大きくなってくると見て、ダンゴムシも青紫蘇も、それぞれの生命力で生き延びているのだなと思った。コロナ禍であっても、季節は間違いなく訪れることに、自然の力を感じた出来事だった。(K)